

倉橋先生についての

おもいで

石川 謙

わたくしは、この二、三年御無沙汰をしていて、しみじみとお話をうかがう折を持たなかったが、先生を思い浮かべる機会はいしばしばあった。今年の一月頃にも、NHKの「光を掲げた人々」で先生の業績をひろく紹介したら、という話が出たことがあった。現存の日本人は取りあげない建前から委員会で一応沙汰やみになったが、その席上で誰もが先生の幼児教育についての業績を認め合ったのであった。こえて三月には平凡社の「現代人名事典」に先生の御履歴を執筆したのであった。わたくしが先生を存じあげたのは、ずいぶん昔のことだ。まだ東京女子師範学校の校舎がお茶の水にあった頃、当時附属高等女学校の主事を努めておいでになった先生を、主事室におたずねしたのがたぶん個人的にお目にかかっ

た最初であった。その後、昭和十二年の九月から女高師にお世話になるようになって直接に先生の御指導を受けたり、御様子をうかがったりする機会が多くなった。先ず第一に思い出されるのは先生の、小柄ではあったがよくお肥りになったたくましい御体格と御健康にふさわしいきびきびとした御活動ぶりである。その頃先生は女高師の教育科の主任教授をとめながら、附属幼稚園の主事を兼ねておいでになった。そうしてその上に幼稚園の保育を養成する保育実習科の責任者として立っておいでになった。先生のこの女高師に於ける雄弁に物語っているように実際に幼児教育の仕事を指導しながら幼児教育の理論を研究しておいでになった。それだけではない、幼稚園教育を学校教育の一環として、国家の学校制度の中に織り込むように社会の世論をつくり、文部省の動向を導いてもおいでになった。ということからつながらる問題であるが、幼児教育にたずさわる教育者をはぐくみあげる教育機関を制度化することにも大きな努力をはらっておいでになった。それだけでもない、幼児を幸福にすくすくと成長させるには、学校の側の努力だけではいけない。家庭での、お父さん方、お母さん方の仕打しうちを現代化し、教育化しなければならぬ。というのでこうした家庭教育の面に向けて非常な努力をささげられた先生が文部省の社会教育官として、文部行政に協力されたのもこの立場からであった。こう見てくると、

幼児教育の、實際・理論・行政、幼児教育のよって立つ基盤ともいふべき家庭・社会の改善計画など、およそ幼児教育に關するありとあらゆる場面を、その広い視野の中におさめてこの一筋に全靈を打ち込まれたのであった。先生のような雄大な視野のもとに、ありとあらゆる關係方面に向つて努力をされた先人が、いつたい小学校教育の方面にも、中学校、高等学校、大学の教育の方面にも、たった一人でも見出すことが出来るであろうか。私は先生を持った幼児教育界の幸福をしみじみと考えると同時に、先生の偉大さを偲ばずにはいられない。倉橋先生のたくましい御健康から連想して、何時のまにか先生の業績方面へ流れこんでしまったが、先生についての思い出は、まだまだある。先生が生れながらの幼児教育者として、立派な素質を持っておいでになつた点もその一つである。晩年の、おそらく六十才を越えられた後の大先生の倉橋先生を幼児達がまるで遊び友達のように親しんで、なだれをうって寄つてくるのを迎えて、嬉しそうにニコニコしながらいかにも自然にその中へ融けこんでいかれる風景を、身近にながめて私は幾度かため息をついたのであった。この一つだけでも、先生の残された数々の業績に較べてまさるともおとらない偉大なものを感じずにはいられなかった。もう一つだけ先生についての思い出を述べさせていたただくならば、先生が幼児教育についての我が国の現状の良さにつけ、悪さ

につけ、何時も深い反省と責任とを感じておいでになつた点である。昭和十八年頃のことであつたが、その当時の国家情勢から、自由主義の養育法がひどく圧迫された時のことである。或る若い無遠慮な学者が「幼児教育を今日のようならしめないものにしたのは、倉橋先生の罪である」と云つた意味の言葉を先生に向つて、あまりつきつめた態度でなく話したのを、私は側について聞いたのであつた。すると先生は昂奮もせず、弁解もせず、深くくんな様子をなさつて「その点今ほくも丁度考えているところである」とお答えになつた。私はこちらで、先生が教育上の自由主義であつたといふことを感心するのではない、日本の、全景の中に点じ出される幼児教育の全ての姿を、我が身の責任において感じておいでになつたかと思える先生の、身をなげこまれた心構えに深く深く心をうたれるのである。

(お茶の水女子大学教授)

×
×
×
×